

汲古一心

『信・越・上州の碑から』(一)

中村素堂

昭和十四年というと、今から四十余年も前、日本が難しい国際情勢の中に立っている時代であった。新潟県上越市(もとの高田・直江津・新井市)に本願寺の高田別院という、むかし明治天皇の行在所があった所に標柱のある大きなお寺がある。

この地出身の陸軍中尉西野徳治氏が日中事変で敵前上陸を十何回か厳行してついに戦死をとげた。これは類似的の戦功の中でも拔群のものだとして軍の上層部も驚いたほどの叙勲が行われ、その称讃記念碑が上述の寺の鐘楼近くに建立された。

題字は中文派遣軍の畑俊方元帥の書で、巨碑といえる代物であった。これは書だけではなく本文も私に作れという命令であった。若いから思慮も浅くつい謹んでお請けしてしまい、五百字くらいの漢文を草して関係方面の許可を得、今後はこれを清書もしなければならんとなつて、私も考えた。自分のような若輩に文も書もお任せ下さるのだから、これは有りそうで割合にその例も少ない隸楷という書体で書いてみようと思ひ立ち、先例を調べるやら書体字典を引くやらして何とか草稿をまとめ、この辺りの良工だというご推薦のあつた金子という石屋さんがこの刻を担当してくれた。

約四ヶ月経て北国の春の五月に、いよいよその除幕式が行われた。陸軍の上級の人々にまじつて県、市のお歴々も列んで厳肅に式が進み、白い幕が縁者の手でサツと引き下ろされると、高さ四メートル弱の碑面が現れる。その一瞬、びつくりして思わず口を衝いて出た。「こりゃ巧い彫りだ……」私ひとり大声をあげてしまった。沈黙のまっただ中のことだったので、私は非常に不謹慎のような自分を恥じて赤面するのに、ご列席の名士の方々の眼は一斉に碑に集まつて

しまった。

後になつて、あの書体は楷書とも行書とも少し違ふようだが何と云うものか、特にこの刻字の巧いのはどういふ点かなど質問もいろいろあつた。広い碑面いっぱい紙を作るために、大判の和紙を何枚も継ぎ合わせたので、その継ぎめのかすかな高さに文字の線がかかると、これも極くわずかだが墨が引つかかつて細い隙間ができたり、または余計な墨が付いたりするのを見のがさず彫つてあるので、縦にも横にも紙を継いであるのが、これを継ぎ足した自分にはくつきりと判るんだから、ひとつひとつの文字だつてこのように彫つてあることは申すまでもない。といつて感嘆すると、式後に表裏を凝視している人々も多かつた。自分にとつては波法などに隸書の味を添えて繊細な工夫をしてあるのだから、この削りは有り難い技術として深く感謝したのは当然のことだつた。

これは石匠金子君に近い地に郷関を持つ旧友平井勝利君が、何度か足を運んで鞭撻してくれたたまものであつた。夜になつて、自宅の鶏卵という一折を持って宿屋を訪ねてくれた金子君が、あの満座の中でお賞めいただいたのは涙の出るほどうれしかったと、掌の甲で眼を拭いていた。何ともいえない質撲な人柄にほればれさせられた。県下の名工として栄えたと聞いていたが、



小野神社碑

戦時中に亡くなつたと
は惜しいこ
とであつた。
(つづく)

〔書範〕

昭和五十六年

十一月